

七部集大鏡

續猿蓑
匏瓜

五

中村俊定文庫

文庫 18

999

6



一書よ同程雨とくや吾のゆく候て時く日のほかりぬめて
 柳のまはれ落さくハ九宮もあつ雨のぬる境しを何となく柔
 曲のすれれるとけあろ成能情のまきつて枯柳ハハ九宮あきく
 くるり詩人の常しよてハ九宮やとをなれどりて云々
 一書よ云柳のまはれ風はなほひききとるあつきさハハ九宮あきく
 ぬのある命うとこの見えぬや

一書よと云てふ家くみ院教まあれも悪く用ひさく一書よを
 の落ふたをす秋くもさる白く九宮湯のぬるうして上りあて
 こるきくと九天くひ雨とさきしり候まの之柳の舞るさは
 ハ九宮やとり候しんきさあつと
 一書よ云と云くハ様のをとらふさあつとよめ貫之の和
 一書よて虚実のさあをぞりせりともさむうそとの白く
 母のをあつ小河埋てりりーろくさ
 何となくさうあつと門の書分

一書よ云落翹々竹下の三聖と會く世向くまのや遊舞
 限りあつあつのみ又あつ

ちうくくよ空はあられかしまる
 川さくくを流るる舞まさるたふやうさ

一書よ云落愈々舞つくる舞女は面影あつとあわう慈を
 舞ゆめる嬌態のあつと舞ゆつされハとそえ曲め人の舞
 情をつけつとをなほとあれ

春折 秋の佳あま 怪かーと
 舞路乃息子女舞伴 乃り

一書よ云とて城よ云置一の高きよ嬉するら付
 「秋を度くむのふれくうのさきよ

さみのふれ秋と佳かそりりハ冬の佳あり
 つさくとる雪川すあるほー
 冬のみまきとさ乃をねなうら 飛

一書より云草拵を服疾と云る凡は作らむ蓋朝花集一
兩章より云斧鑿の痕と見す

削やうしよと云刀坂の冬を此凡

一書より云桑尾谷と麻谷との居は坂阿り又度原の
西の方と云ありしりまう考一

伴約をきく人傳 取の 雨

くき、強くと弱とつれま流り考

一書より云人高人のまよはる一女子の凡はあはる
つさう

御の情一門と云たりなり
百姓よと云く世もも去岡さよ

一書より云五柳子の舞一書より一書と合めや

様世よかりぬる 衆の 松秀小

月ハそくぬれと 群一 かな 圓

一書より云巴々名の茶集り一法と云と比無一と云ふ
らむむ楚辭と梅を志し一越と合めや葦と淡そ
の於より舞とりてはあはれけ合をまし一しき
らの巧みなるて自惚とも出せり松梅傳よちうく
しと

至味堂云至後佳師の雜談集子

「梨のうらまふ」のくくくふハ

信々松秀の名残一と云

のまよもや

三草紙よ曰伴梨の連気存の生國よ書のをまよハ
跡入高くと想よやまううてまうれ跡と云と探ひ
昏るも傳よ二月斗書らまくと一異板もせまやと有
しよは平年六坂しと没故ありてそまよまよ止よ
と云全神ハ貞徳の彦根うれ鳥集やと云と神と云

増補もよそとなく終るの所もちうてりし始りよそも其
如ハのりてし一編の滅ぼるる世もまはく出世する
不審之しと云く愚考もあはれ其行人の擧ぐりの
るを考へてはし書り全辨原滅ぼる處まで保括し
しも基之より七郡の列したるに於ては後撰義の
部号たるハけ句と社巻たりあはれなり青んとの
左の増え守りなきやうにとりてし事ありし
多政補の基之りもまはく世に流布しては保門集
と入る七郡とまはる人もありしをわくまはるは
れししむけざるくはけつる等と名を門集の保括
しと終るるまはるしむけつるも一町の病ありし定規の付
修し日

赤 恒るるも 証殺くち 東 る 嵐葉
山 依と切くくけざる 関 の 糸 春

漢りくねハたりぬ 世の中 一 酒堂

け山伏の一カと名を言生涯悔とあひし一と云くを印毫の
目の標括して能狂言の文句は判りめし三人山依は
切ししむけしむらむはありし一てふ科人と見えし後
保括しれは教伐の事味ありしとありひありし後悔
勝と罵りのおぼくしとありし

大 子自由 一日ある 暮 の 陸
中 の 流

一書りふ門徒よ 若月のは舎あはるるしと終りし

一書りふ二親の命日ととま

かきりて一帝の中と押 今
けありしは生る花のけもなき
更考りるあはれありしと終りし

字と眼と附くは市ハ大如風上市下市是市の始
了くと眼とははけあさりと意ありて二句のるま
整と入意ぬ妙あり又曰市ハ聖徳太子大和國
之輪の里よ之神ありて農家の者日くは魚の目
よ六糸と定く佛法を穿りぬ人

今宵賦

賦ハ布之給與也分界也責取也苦惡ともよと
陳鋪之事よりて其情と形とを明明白白に形容
して其述る所分明せる一譜と賦とのよいよ
何て恠ぬまを朱子曰直指其名叙と事之甚
單也耳と語是也

衣裳は湖ありの林を合む

一書よ云林氏詩とて修月卿合衣裳湖上秋

志と心

そこ 心く

修よして修よ似るもの

警僧之頂のうらふ一撮の毛と髪一並ふり
晋書白蓮社記曰在僧在俗俗而在似僧者

其交の流きものハ砂川の石を小松を
ひくゆるめ一深かき秘ハまき

且味なくして人は飽るる事

管子曰よ人吏多詐偽無情實偷取

一切譴之鳥集之文鳥集之文初雖相驩

後必相咄

支考

且考莊子曰君子之交淡如水小人之交甘如醴君子淡以
親小人可以絶彼無故以合者則無故以離

やうしとらうしとよまらうしとらうしと

好ひよあぢり〜か〜む

愚考社律曰明年此會知誰健

罪 孟の教〜あを呑 せむむ

愚考李白ら金谷園の杯〜し 孟の教三斗ことと
王羲之ら蘭亭の會罰酒者十六人各詩成ふ。楚惠王
侯祥臣作詩送吟給罰盃

夏の教や 翁の〜物 冷〜物

一書よ云水色と會ある 冷〜物とハ 楚句〜 西ひらむ
又詔の復秋〜池のすそなる白冷〜 物〜附有る
ことと云く愚考水よひやせむ冷〜ものよふあ〜と
黄冷〜之翁の〜の底〜も 師〜か〜服も 極先〜
〜んも 志ぬぬ

考〜工夫と〜〜〜照 澤

おれら事〜事〜よ〜よ〜る〜 橋の 数

持佛の形〜よ〜月 也

一説よ世々この〜は 津の山や 若良の里に 橋を〜
歳〜の〜は〜よ〜よ〜れ〜ら〜

一書よ云考の 兼日ハ必日ある〜 清〜の〜れハ 照源と
考〜て 工ま〜するも 理〜之 決ハ 主人と 橋を〜と 足〜を〜を 例
の〜海の人と 勢〜せむと 橋を〜が〜 あり〜と 男
〜と あり〜と 中〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と
何の 橋も〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と
あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と
あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と

愚考考の 兼日ハ必日ある〜ハ 照源の 工夫よ 及〜と
考〜より 兼日ハ必日ある〜ハ あり〜と あり〜と あり〜と
あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と
あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と
あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と あり〜と

くうり奇もふらあふくくうりも茶師の媚めか〜くうり去
未子龍叔のら附ちる色ハ貴三の句よ西て先一照應の
工夫と夕日よて定めそ夕日よて夕照橋の角
と空め持佛ハ素乃佛よ〜ハなく通系々本係真の
持佛ちる〜形〜ハいそれ守遊系々本係ちる〜ゆ〜よ
平生照鏡〜の持佛の形〜ハ作〜るもの〜定〜年
あわ〜照應の赤城よ夕日の影〜ハ〜中の句の人
おの影はよ〜傷〜ゆ〜よ〜この句の影〜ハ〜い〜や〜り
天文志曰者高飛西定天气

森時がよ又又むむ〜り〜初さ〜
一書よ云古交よ〜刃つ〜〜て集む〜すおさ〜く〜ら花
月のおも〜てふあ〜ら〜ら〜る〜ハ

形よ何ぬ 茂句もあよ神 橋

茗考社子義々詩よ曰鳥入性研耽佳句詰不驚人死
不休老去詩篇渾漫與春来花鳥莫深愁形よ何ぬ
〜き〜句もあ〜ら〜の句の趣と喜来れハ花嘆も唱〜ハ
喜来花ハ則気神橋と意味深重也〜

詩人難〜て曰待のふ〜のあ〜の〜み〜て難信の表とす
新があら〜

陳〜て曰橋ハ素乃の美なりハ佳句とを〜一〜
人と驚さむ〜と〜定よ照應の喜ハ照應とや

又難〜て曰待のふ〜のあ〜の〜述〜て社子義々糟ハ
〜ハ〜あ〜〜と〜

陳〜て曰待のふ〜のあ〜の〜述〜る〜ハ別名人の〜
七言サハ字と僅十七文字のあ〜ら〜つ〜る〜
西又あ〜〜と〜あ〜〜と〜〜人曰

なまそくはるほるよはむひくし文君の所音も
破のまきしれはよ思ひ出さるるよ

酒部 庭より琴の音より窓の花

愚考 史記曰卓王孫至日中謁相如長卿謝病不能
往臨卭令不敢嘗食自往迎相如相如不得已彊往一坐
盡傾酒酣臨卭令前奏琴曰竊聞長卿好之願自娛相
如辭謝烏鼓一再行是時卓王孫有女文君新寡好昔故相
如綵與令相重而以琴心挑之

人の音もかく窺ひし なる 様

愚考窺はぐと吟すく人の音もかくのしとく
かふういやくあめ御ハ窺もぐと花は物人のま
まるとのたつとる向をり

草薙の庭おとさむ山さく

愚考草薙の庭おとさむ山さく

下総の代金より献上の一ふりそ形丸く大さあり 尤割表
方のかこその敵軍も文之佐金のま様よよとくハ
下総あり

咲かす花や 飯米 ぬ十一石

愚考白をりて白ますりのり岩徳の肉ふ人技様
なて志とく柳ハ人技様の位此少なき有さ
海成へ一様おハ士以上の産家よりて人技様の
五をのりさけして五十年とく結免をふむの記ハ
ハ岩徳の縁は様川とく

ハ岩徳の縁は様川とく

公名といく人のたふさる柳のりを様はる九をり白ひ
りうかの音の休ぬきも也

まもやけしきしものふ月と梅

愚考家話の内姚宋依ら白よ梅花は月大情生

里坊よ 雄きくくや 梅 の 花
愚考 惠能和尚行黄梅師五祖弘忍大師為行者在雄坊
梓白之間於是大悟受衣法_二古_一於南_一為_二六祖_一唐憲宗皇帝勅
溢大監禪師

一書よ 長力か くくる 柔 莖 の 柳
一書よ 回響のむ 踏ちくく 細腔を 大長刀よ さあ
切けりやとくく 奇の 体くくく

愚考 長刀丸の附よ
大長刀よ ちる 風を あく しく白よ
そのの 細腔 纏の 袖らふらむ

長刀のくくハ 武田 兵略よ 白薙 刃を 元来 太刀なり
それよか しくく 互に つけて 用ゆる 故よ 長刀と書く
されハ 長力よ 限うて 一振と 云 旧 建考 録よ 曰 光仁帝
長城の 兵器よ 扱て 作く 心 平 清盛 公 長刀の 利を

きむ して 一門 皆是と 用ゆ されり しく 全体の 兵器
しく なる

学や 柳 の ちり 藪 の 葉
愚考 学ハ 竹よ せれ 柳ハ 正月 花の 葉 柳よ
しく 何きも 尊の 縁よ のり さまる 葉 柳よ 柳と竹
と 花 きれ しく 見えゆ

芳野 西行の 歌
鮎の ちれん すさま しく 游 の 名

愚考 ニジカウの 鮎と 唱ふる ちり 五輪 姐よ 曰 凡魚之
游 皆 逆水 而上 雖 至 細之 鱗 遇 大水 亦 槍 而上 鳥ハ 凡
よ 逆ちて 飛ゆす

山吹や 垣 しく けり けり 白 兼 一 葉
一書 山吹 七葉ハ 重花ハ かけとも 山吹のみ の ひらり
しく なる けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

小股綿より光をやらせ玉椿

愚考小股綿ハ粟の皮をむとの毛をとりて十條より
似たる服衣之考りと六則光明あり 浮陀の光ぬハ十二
光明之別 按糸瓜捨の意久安百首 玉椿光はみくく
君う代よりかたり 咲うとむけの花

振おころし けり や 庚申の麻の角

愚考淮南子曰陽之至是以春則群獸除角

えりや 衣 深き 衣の 表

愚考侍曰東方未明顛倒衣裳顛之倒之自公石之
又木葉よりさうに海よりおまの衣をいそぎはく又
よつかうの身よりおまの衣をいそぎはく

人も 見え 喜也 鏡の 裏に 梅

一書より云 伊勢物語 月やあけぬ春やむら けり
おろぬ赤糸ひさつハおろぬの力より してくおぬおぬの

梅のほき結実より白ひて鏡のえ梅 ころ只人にも
おろぬさるしき 梅よりおろぬさるしき ころ只人にも
ト長りぬおぬ

一書より云 鏡の宿の梅れいと見たり されどもおろぬ
乃徳と見え人もおろぬ 畢竟鏡れりよ梅のえ
おろぬ梅れりよハあけり 都々世の人の鏡乃面ハお
ろぬ ころ只人にもおろぬ 世よりおろぬ
ころの白ぬ

一書より云 深山よりみ雪降り 雛妓人より麻志あり
香葉竹よりおろぬ 雛妓を鏡のうらよ引きて 鏡の
ころ只人にもおろぬ ころの白ぬ

一書より云 庭の人よりおろぬ 梅のうらよ ころ只
梅れり 梅れり 梅れり 鏡の面たしハたし

一ひやくも新しき強しめくは惜めり
むとあき角のふとを比しその吟中略
後之嘉の挿板のるハ源信明家集より
のふみと後みそのかよもるるの之中と伴然るが某
尔後之嘉は鶴の形を傳へて作りられハ新よふと
ともちあふいのひむらうまむ田舎のうらをそるる
る今後明とあよは嘉をわぬとせられしハあり孫と
もはきよは叶ふとていふを
流表の巻を足て思ひ
やりしきりお似たり又梅花後とて古物入るは梅花
の形よあとののよ後明ともて古後ともいふの者
一書よ云墨梅の詩よ瘦損昭陽鏡裏春と云
一書よ曰さきくの説ありと之をきりて極意を
りふハ易よ良其背不獲其身行其庭不見其人無好
いふとめく近思録存養類程子曰人の其止るは若む

さるり能き所以の者ハ欲し動けり之中略後之嘉の梅
も則人の背れあり脊ハ立附りともよらるるすれハ俱
中しいさかも思慮なくしてともよはてりたり其
脊よ良るしやハるものすあつて毛男をきり
を刻るしとて蓋は古後とて求むる一章よハあり
後之嘉のうらうらものハ後とて又いふもそれと
附るハ是すしとて後とていふ
去時堂云原楚辞雜強よ曰世人不知後表梅は終ハ盤佳
後師いせの國後之とて思ふしとて後とていふ
玉葉集よ

一書よ白陰ありとて東の梅は灯をかりしありす
一書よつとて去来々湖東問答よもけりあり梅を
照るありやのつとて梅は君
一書よ白陰ありとて東の梅は灯をかりしありす
一書よつとて去来々湖東問答よもけりあり梅を

五元集拾遺よ其の部よ入ハ非今家よ其書の部
出ハ改ト云ク

湖東同書よ云其角ハ時々あるを以テハ
ハ初陽儀の事ハ一説よ大年のお大黒
燈ハ是と云ク君と云ハ是と云ク
昔ハ初陽儀ハ一説ハ大年の夜元朝
平と云ク君と云ハ是と云ク
昔ハ初陽儀ハ一説ハ大年の夜元朝
平と云ク君と云ハ是と云ク

其考ハ其角ハ解の鏡ハ一向
君ハ其角ハ解の鏡ハ一向
法隆大殿ハ其角ハ解の鏡ハ一向
歳旦ハ其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向

其の部よ入ハ其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向

其の部よ入ハ其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向

其の部よ入ハ其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向
其角ハ解の鏡ハ一向

つらものゝもて云はんと念十り時を老せし
命を〜と哀しむりしは彼女子を〜と念し
は百余年を〜と〜

同國空印寺八百比
五尺の本像有と云

曉乃 雷と〜と〜

愚考 ヒマウ之五輪姐曰電似是震之大者但雨霰寒
而雨電不寒霰雖暗而電易暗如驟雨余在奇魯四五月
之間屢見之不必冬也史書所載電大有如桃李者如鷄子
者如谷者如斗者如氷ハヒマウも〜の〜あり
酉陽雜俎曰木犀花夏有電又慶安二年五月十三日武丹
川越之障〜電を大ニ小四ナあり人馬多死

愚の君たり〜と〜

愚考 僧聖徒り詩よ 燕子 辭業始到家社能啼
處在天涯是等の意よも似りり

浪〜も 杜宇

一書よの云吉新 浪よちつ牛片〜た〜よ時を遊四よ
啼〜の〜と〜

愚考 食の奇と〜の〜万葉に例あり
時を浪の氣あり〜の〜啼〜ありむ
不〜まに浪の〜あり〜

浪るのやよ〜の氣

愚考 衣冠〜と〜の氣を〜の氣
ふるよひの〜も〜の〜
西京雜記曰目脚得酒食一灯花得錢或乾醋等而
行人至蜘蛛集而百事喜

石〜や 喜つ〜

愚考 李中〜の賦〜 韃〜と〜む〜たり
去橋の入〜有〜と〜 和名抄 韃

蔵人の情子〜と〜

公石云古今の序よ商人の〜と〜

体しつらぬしとある下は合めむとあり
粘りたる 蛇も 蛇の 号 つか
愚考の五月のあはれなる 蛇の 粘りの用なり
神儀の附くも 蛇も 蛇の 粘りの用なり
伊吹のうゝの附るなり

みり ぬも 蚕 粘り 葉の 畑

一書よ五月の短きれはつらぬとあり
りありしれとも 蚕すれはつらぬとあり
葉とてしれはつらぬとあり
いれしつらぬとあり
信より 蚕の 粘り ぬも 蛇の 粘り
若者 蚕の ぬも 蛇の 粘り
やう ぬも 蛇の 粘り
ぬも 蛇の 粘り

あつらひしつらぬとあり

十論為辨抄曰故翁の巻白も 附白も
古詩古言と裁入るハ巻くも ありしつらぬとあり
其法と知りしつらぬとあり
もあつらひしつらぬとあり
初めぬも 蛇の 粘り
りたる 蛇の 粘り
けりしつらぬとあり
この詞のむも 蛇の 粘り

うらむしつらぬとあり

みりしつらぬとあり

かくいしつらぬとあり
てむも 蛇の 粘り
あつらひしつらぬとあり

楚の一字といふ事あるは固き事なりあむくそのこと
まじよ中抄に記しきし一削の偏私集に入らるよし今
其集と傳むる事ハ其形々の麻忽か不れハとそらも
然つぬ楚とありハ故吏も古傳より及ぶ事一あり
等と載入の徑とす一
余味書云事度集云文ハ何思む事の子孫教よと
唱し

きつて事ありてとて去なり 蟬の聲

愚考陸雲、蟬の賦ハ蟬有五徳頭上有緑文也含
氣飲露清也黍稷不享庶也丕巢其儉也應候鳴
信也きつと事ありハ信と連て去ハ儉よりむ土用と
候て唱と用とて止ハ信虫なり
又傳も然ハ乃中れいさけし
愚考 後漢書云 細腰を好む事ありの世像死するも

のもありとてや見ま冠と法むる事あり是あ
るゆもあしひ合れそわの事よ是ゆ 唯南子曰吳王
好細腰而民有

殺命
白記 万葉集曰吾妹腰細之頃輕浪子之其姿之端正

あつ後やまきりてとて去なり 蟬

余味書云山陰中風を待たして百羽の群をうりて曲宴
けけ舞子と候て萬葉集とけけしめしあつれハ後
所なきゆとあり今そのま風とりてを年一上り
山陰の風也とてあつを川村の今し

伏原やまきりてけけのあ

愚考新田義貞朝臣の軍勢よ曰若人道は迷ふ方
角と矢少時海原の雲白くもる方とて一人衣
をかむとてまきりハ深と候よ是れとて
あつれハ一ある事あり又あつれハ
あつれハ一ある事あり又あつれハ

愚考 藤原のつらふ 藤原下所守 五万石を領すべし

者くの詞平人の白くくあしき

ふきれちつても 藤原の月

愚考 新よ 藤原のつらふ 藤原のつらふ 山崎のかけを
附を 音ハ 唱れらるる 藤原のつらふ 藤原のつらふ
今も 藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ
てちつても 藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ

藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ
おぼろ 秘しし 藤原のつらふ

藤原のつらふ

姨 藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ

愚考 之を 女とて 姨 藤原のつらふ 藤原のつらふ
藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ
木を ありらる

川よ け川りや 月乃女

云石云 孟子曰 徒流下而忘反 謂之流徙 流上而忘反 謂之
連と云く 流連 流と云く 連行

船形の雲 志をくくや 其の親

愚考 七夕の 雲の 志をくくや 其の親 藤原のつらふ
織女乃 銀河の 船よ 志をくくや 其の親 藤原のつらふ
よ 白雲 雲乃 志をくくや 其の親 藤原のつらふ
しつや 志をくくや 其の親 藤原のつらふ
七夕の 志をくくや 其の親 藤原のつらふ

愚考 長明は 季お 藤原のつらふ 藤原のつらふ
ありし 藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ
ぬ 限り 藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ
新を 藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ
一つを 藤原のつらふ 藤原のつらふ 藤原のつらふ

一書より云ふ松葉のまきりくはつりり巾の香はほし
月よりけりふけりる海草生るの香くくも光るをけり
若くはくふさくもあつ軒すの香くもあつものを
くくくくく松葉の清き

老の名はありくもくもくはく子雀

一書より曰くおの尺乃奇くはゆのうきまはつ
くくくれの有くくくもかりひもかゆきもの写む
何よりくくかめくくく秋の風

一書より耽滞くはく古道く人け秋風動ま森の香
も有つくく

松の葉や細くくも似は秋の香

愚考、松の葉の秋の賦はくはく月日皎潔明河
在天四無ノ夢聲在樹間曰嗚呼悲哉此秋声也これ
松風界とくくくをくくく

編書や園のくくくく位の香

公石云く位香の羽はあくくきある物なきは
園の香はくくく編書とわけ合はくくく
くくく

藤花よりく麻葉くくく

子持云く由く人由山田の菴ちくくく麻の香は
香かくくくくくくくくくくくく

農業

記一や一くくくくくくはの香

一書より云く記一や一くくく物切記一はくく
くはくは田はくはくくくくくはの香はく
くく切記一のくくくくくくくく
候家の牛從くくくくくく

りつゝの一寸の芽面者肉よりてくらくくま女の琴を採
て見る者より一息を乞ひて中を歌をのりりつゝ
及て居れば産くくく一むら居の歌者中しる者
りりくよ尊て同くくよ是ハ梅歌にのりぬのくく
生涯終くと始るく死後とを概々のゆりて折
有事くとゆりくくく一編書やと録しゆくく
雷光射露の徳あるをなりぬのきくま女と及
くハ義をくく折もくくのちや 密教は菩薩よ
一 教の所ハ居の徳と歌一 かくくあるゆ
の奇れくくくく曲もくくま女は同音の連奇
ち身ハ秋風やくくくつをむくくく一を筆
を筆の又今ちくくは琴曲の事をくくく白作
せくくくく小所葉子の同音のくく解ぬ
よ后皆速くく小所く歌は居乃てくくぬける
をあああくく一と六悲一あり然るを葉子の是をた

とめむる為なり小所とくくく一とくく居乃ハ大
野ぬくくく一と云結めくく連奇のくくく一
万葉よくくこの大野の居くくくよみくく大野よ
くく生れ小所くくくくくくくくくくくく
ゆめくくは勝るくくくくくくくくくくく
ゆめくくくくく一程くく事有歌のくくく
よむくくく一とくく書あり一言終りくくく
をくくくくく一とくくくくくくくくくく
と切るくくくくく一とくくくくくくく
を浅くくくく一とくくくくくくくくく
あくく歌のあが居乃徳をくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
書ハ莊子乃歌を合たり莊子之楚見空弱弱

骸然有形下畧援髑髏枕而卧夜半髑髏見楚
曰子之然者似辨士诸子所言皆生人之累
也死則無比矣子欲聞死之說乎

乃上之りり人老年よれお時ぬ

一書よ云お時ぬ此保しき体をおき人の心
つりりゆゆハ世の人よ年をよむて老を去る也
とととのころるるり

杉亭云韓偓の詩よ衰老何時見兄弟春
灯愁泣到天明不知短髮能多少一滴秋
霖白三堂一ホの詩の意あるへ

文の夜や鏡をうつる一吋ぬ

一書よ結之玉園表鏡中ぬたとの侍り也云々

元禄辛酉初冬九日素堂菊園を掃

思考元禄辛酉とハ此とそハ癸酉とて元禄

辛酉の事ハ必是なり辛未ハ元禄四年とてハ八月
困り元禄六年ハ九月七日辛酉年なりハ字を是
と素花いさく開くさくまを

菊の香や庭を一切る出の庭

一書よ素花を初花を素しと初花ハ秋のハすく

を一素ハ一と也ハの初花を素しと初花ハ秋のハすく

りハ初花を素しと初花ハ秋のハすく

延喜帝乃ハ初花を素しと初花ハ秋のハすく

をハ初花を素しと初花ハ秋のハすく

はハ初花を素しと初花ハ秋のハすく

冬のはハ初花を素しと初花ハ秋のハすく

思考鶴林玉泉曰景子一孤雲二十年長孫送生一

然皮障泥教十年蓋豊而練後若陶則明

十年著一冠言其意也其意を留し終り
殊やぬ取らば作らぬ 兼の友

五考揚去は宋葉の居士と陶淵明と宋葉
ハ為陽縣とて原梅の地あり其法乃其ハ淵明の
りとのとらるり人見井洞老人ハ元詠中の書信
りしとるを成し聖書結の事成るり

一考も志不さぬ 菊乃水止
一書も云ふ上人持やして命を中なるハいふふ
くハのふかぬをりしゆり

蝶夢云揚去の諸南とありと之持るり長男ハ
書換るり史記列傳ふ委し一危蕪次子器を
負ふてりたり金をかりてそれ器を挿くといふ
長男を金を惜みて故し中あつり故き
この意を死とく速たさふなり一考も

あふさぬハ創乃長男の意也やふさるるを白
化あつるり

本かや 芥子 吹く牛の夢
はうしや 蕪茶しんち 守牛の角

かひてあひの目よしとてし 乃直風をさるる
こふ吹風をせさるる乃之をさり

一考も云 夷搦とあるは貨殖乃業事なりて持
其海島のあり配さ かのの行着なりや

時の白く思ふきりささく 尋常の事賣の
袴着く斗くくを面白か 福人の余
おつて川もつてぬ 賣るるも 袴着るる
よし一書せしき 体之

夷搦 鴨ふ 宋なり

馬考の警の鴨小化哉
予るるより
みく示雅二曰鴨ハ警也野曰鳧家曰警麻を
さく馬とく人ありりまを鴨を山を
あつるりゆゆ推遠其万葉集字より見ゆ

杜又魚也腹をちりて降一義

土自其く去因之度係本草云杜又魚也如也
詳日本草推遠より又手りり方言係神ハ大
本草より又手りり月より之を鴨と云る河麻
小何よりゆゆは是く一種巨大なるものあり異
魚國後より所謂角鯨と云るものあり越あよ
る者々と使品と云るものあり大和本草云本草
徳同よりあり休又して河と云るやと云る人
ちと云るはははと云るはははと云るはははと
魚は魚と云るはははと云るはははと云るはははと

て道徳云江州乃湖云々一形河鯨云々色黒く
まきまき守あり使又魚も湖よりあまをく吉青も
よめり一説より乃大なるを河鹿と云るはははと
杜又魚也其の味も一具まき杜又魚の形あり
日本紀名云杜又魚河鹿之山河よりある魚あり
と云るはははと云るはははと云るはははと云る
草山友人質祝傳云杜又魚又伴杜又魚又伏念魚
和漢三止牟保川一名松野魚土附魚豐氏帳鹿魚上土難集
食物吐哺魚 寧波府志雨 あしりうん 占 名かちう 伊 方
本草 又難 不 能 煮 之 け 言 う て う 言
躡中く同名系方云云ん不能煮之け言うてう言
かくはははと云るはははと云るはははと云るはははと
移んまると云るはははと云るはははと云るはははと
才云るはははと云るはははと云るはははと云るはははと

本一と出六あうず五形長あり又一種よく守るは
了くて推るののあり朕や〜
うらひ〜云又ごりをも河原と云舞の〜
たり鳴〜と給抄大木あまよふ又印

何事〜も条入中〜り 浅 倉

愚考鶴林玉露と日林林菟章と備食玉枕同一
履也布袍蒲絮と和装指輪同一履也知此則食物
寢費可一視矣以之或人難〜
を履紙を〜も字ゆ〜

陳〜云少〜白〜
知所〜何を解也〜
る〜
章業〜と〜
債那〜

か〜
又を〜
り〜
思〜
抱後云今世持人〜
を〜
余情ハ〜

今人云家私は所の身れ〜
身の生塵よかけ〜
心幸〜
忌考〜
新氏位知不可番同者也〜
む〜

催佛や新迦〜
但盤 係

大羅刹世中熱最放〜
山寺〜
終身〜

夏より撰集達を解飯王を子として所報の書
親如くは傳記の五のふり有り吾輩の書者
解飯王傳記の二五よは傳記の書者
かけ合せしむるの句とせり撰集達多
大石三十
肘世書よかけしむるの肘山林を
居てしむる由しよ金木よ
石佛の号よありし血あると云く
碎けて一カ
一書よ本朝文様は佛傳の考く
つねの句よ

東よりよみたり白雲の墓 糸

一書よ本朝文様は佛傳の考く
つねの句よ
吾輩は句よ一首の傳を附合し
つねの句よ
荆門一別各家通三十一
年如夢中一紙致封書向
あ名けり人兼年意難窮
字人八軍へし名寄人ハ
少き。

少き。

つねの句よ

首の書よ 編書ののころ

吾輩通余終日言ハ日蓮宗の輪蓋寺有り
上人刑死よ
空りて首の書よ附ありし
教允ありし首の書よ
ハ敗し大刀取の傳有り
不追罪ハ年を執

左傳曰賞以春
復刑以秋冬也

古書よ白砂の海ハ

古書よ白砂の海ハ
かゝる句ハ金付
凡書よと傳記の
あつためは傳記

振人乃あゝあゝの柑の花

一書り云万葉よああまきはけよりの飯を茶まら
膳りあまは推乃葉よりや馬車せ執柄せ
もも徳森あまの風耕の細うとたのまのんを
持らるるり

説葉大全よ云は白ハ情厚の信り中解か
解いゝ般雲よ小推の花のらるるりよ木葉の
振く出りり白解の信り白事ハ以解き融せせ
寸花も振人の風耕の似りいかにやま
川奇乃乃んたろくそそり唯後の不自ゆるるさ飯を
よみらるるる都く世乃振人を又久く振又解くま
り振りてはあまは葉ハましく山平不自生勝不
るもくらくつひ推すねんくあまハ時高松の柑乃
花の淋く有るそつとまづ信ちあま

ほいんまを葉乃葉よ今振を替り一葉力敏也
よあまのつりりはすつての振人のあまを飯知
て推の花乃さのままは振ひたのり
中のみ風流も面白あまひとくは聖戒を
言ぬらるるりし州ハ振葉葉ま考つ五器一具
のぬき師選乃葉子を儀よつまも甲乙あ
振人を許さくさくさくさあまあり世上乃
振人のゆを先挙て云あす朝らるるり一穀寒
上略推の花乃心りも似く木葉の振又くまの振
りもたつる木葉の種ま句一句よまの定すつり
しやまもしりまも今飯後の形見えまも
をくつりり

葉もあまの草をさりり
あまの白頭荒くそ食我葉之葉貫女葉

もろりののりの中を指すは乃新よと後や社長の
人乃赤とけて赤りのあめのかす〜〜〜の
疑感なくた〜〜〜

月読社藏板

ひねり出

ひさこ

信濃何丸撰釋

序文の始末

愚考莊子不曰惠子謂莊子曰魏王貽我大瓠之種我樹之成而實五石以盛水漿其隆不能自拳也剖之以爲瓢則瓠落無所容非不呼然大也吾爲其無用掎之莊子曰夫子固拙於用大矣今子有五石之瓠何不慮以爲大樽而浮乎江湖而憂其瓠落無所容則夫子猶有蓬之心也又後漢書列傳曰費長房者汝南人也曾爲市掾有老翁賣藥懸一壺於肆頃及市罷輒蹠入壺中市人莫之見唯長房於樓上觀之異因往

再拜奉酒脯翁知長房之意其神也謂之曰子明日可更來長房旦謂長房翁乃與俱入壺中唯見玉堂嚴麗又藻志多藻八水之壺多志の詠きをりり又え影の詠ふ壺中天地乾坤外此の意を摘て書るる之江南此瓠碩多に瓠の人のるを志と則りて瓠号をひさここととる字なり

木のりとし汁を 後と撰 ころみ

一書よ花山院に製ふ木此下をすろろとす是ハたの化りる花をりるるとりりふりるり形 一書よ西上人の木のりとし旅麻をす是ハより花山のりす方をきすりるすは知柳曰古今集よ他人のわけしてまよりの木の

月とそを教むけりきみはふらりのその愚者
口を閉て守人の心よりそ

月待て飯の内裏の目
教 白 流るる ぬるる やわき

一書より飯の内裏より傳へるを大嘗會の時
悠^キ記^キ主^キ記^キ指^キを^キは^キく^キ教^キ白^キあり^キを^キを^キ獻^キ家
拙丹後國より悠記主記の指のより千
載集より雲田の里に指をよそはけり
よめり 愚考日奉記廿九卷曰天武天皇
五年九月丙戌神友奏曰為新嘗十國郡
也^キ齊^キ忌^キ則^キ尾^キ張^キ國^キ山^キ田^キ次^キ丹^キ波^キ國^キ河^キ沙^キ郡^キ
並^キ食^キと^キく^キ新^キ嘗^キ祭^キ用^キ明^キ帝^キ二^キ年^キ初^キ指^キを^キ
神^キより供^キす^キを^キ則^キ新^キ嘗^キ之^キ悠^キ記^キ主^キ基^キの^キ謬^キ字^キ
を^キ千^キ載^キ集^キより大^キ嘗^キ會^キ主^キ基^キの^キ指^キ春^キ秋^キ丹^キ波

國雲田をよめり刑部卿龜原のめはちの
きてめり高代り雲田此村の指を
よそはけ

みやうさるるしよはこうるる 二五

愚考五月五日立木の雨とさ
よしよ指をよめり此の時夏の移り
法より同季より去中よ他の季より
きたれよ去とも去り替れけりより袖守を
燕のるよ他の季よりよめり時夏は白
ありてなるよとよ遠ひて附白電ひる格
別と此教又かき

千部よむ差の盛の一身 田

愚考手初めり天武帝天平二十年七月
法華手初めり始て終ひるよ田原よおて

本朝修成のりり十代目吉良上人定正年中
下中王なる四より今の一月四日移して本山より
子直ハ上十日丑年ハ中十日寅年ハ下十日のり
降去の三朝修成一部より毎歳三月十日百八
まで修成の上の十日を本朝終ると云中朝終未子終
と号く此十日の芥子終千部とて又修成あり
後古傳門院の御影所小して亦くも門院の
号を端ふ乎介信長公の割礼ホあり

此礼死るる 乃のりけりる

愚考此礼のりるる若山法皇三十三所の観音
ふ巡撫しより後入主札示を巡るる形云
埃囊抄世傳又曰若山院の遊世の後巡を微
形しより去程ふ此礼をりるるのりり
此観音を思ふる故るり不僧紀伊玉那智

山より始り天流ま谷汲より終る

然野 見えしと注あり

一書よりある形なりしりるる時を必若山上
皇の侍るりしと云 一書より白川法皇より
の侍るり 愚考若山法皇より若山然野
より限らる白川法皇より保元祀ふ然野
御在ありて聖年若野敷度の内覧子
まハ若く焉と云ふ此ハ増鏡より若く久
仁親王の年十一然野一若きりりるる一き
より若らるる連ハ若多ひる此視より叶り

白鳥弓 紀の関あり 頑 矣

一書より続日本紀又曰若志人の古より紀列
白鳥の関あり獨の娘を若志の女子若人を
若志の女を若し弓白鳥と成て化し去の

胡より書ふに至りて止りて見らるるを後
て去らばの類を名前のそ又双六の目を朱
四々唐去字揚を地と兼 戦の付 定四
出ら不及て継夜を後ふと又兼 三々後
一条院 臣下と打あふ時 三三墓子五
位を後ふ十字集の略又なり我朝より
吉備を後へ後胡有 去尺二寸を十二月を
表一横七寸二系方七十二候の法ありと云
唯四方 ちろろ 字 庵 の 病
一也の跡を法よりと云一々

愚考本期遊史曰急好者よ法を去る居
難形阿と善一 尋て来と跡を形阿と云
ふ固く折るもの形をゆて心を足らぬ阿又
振一々後 善ふ又良をゆて跡か一に

らのみま多交恵見ら一と又続字考集
よ急好の許ありおね多々之せありなりと
ゆのりやを番符よおきておとす一に
さゆのうりおあふららぬおとておとす
おとておとす一に世 符をよぬ多々一とよ
む一に番を逆よ跡をよ一とよみて智一
一に教阿法師の五一よおね多々一せよす
こ一と番符よたきておらるらう一に
く見うせごむてハお かなをさり一とよ
おと一とらひおせ せ中又右のぬくよみて
ふ一に是を学唐とゆよを智て此歌の交
よを一也の跡と虚ふ修り一らあり
智 叢のとならぬ 峠 越 一の
愚考按律より丹波一越寸峠あり一里を

とてふふと五月の廿日と云ふこと連うきことま
てありたり今宵一もゆのたぬとてあふあき
むと悲ひてたり人の掛合も伝へたり入附入
てありと云ひたり髪もたるとすもよ信後の志
中たのけり母をよきまじりといひてあつりの
おぬきて終りのやまてとてしあてて平仲り
らに舟をみよとて五月五日よりおねのめり此
附りのをえよ三百目の雨なむむと後平
仲の侍とてむ老を三百に送りといふ

城下

愚考此書書たるをりて一白を海傍のふ似
くまるといふ叙生とて字ゆり時をゆ種ふあふ
又田舎りの、黙的とて字るまをまむらうのさけ
まハリや秘る古筒の籠もて書るるり一

近海のふふ人の親の控え地の娘をうらち
たりるる見え及ふるを種々の罪人以上やあるべき

林の夜 蓋の物 ありのま

女帝 花心 細き入おそいまで

愚考此書書流門の山時良少将といふ色ぬ
み今宵のあふむとちまのを連ハ女いもさうさ
さうしてやちのふもさるさちん目さありて
夜やうけぬむとたりふゆくも時まらうす
春のさるれもさふ世三つとやうそおののさ
と一いふやわたり人あふ世三つ今をさあのさ
よかおおとあきしてあうい愛よ見ゆやと後そ
すきりうらり此連れ旅送れ歌集よ入物語の次
節を二白引よもて附り
見えくまて定る金よ思すとめられん

配不をくんあふ供佛の蛤
多そくきこち松幽霊の泣やらむ

愚考百姓の白ち鏡舎ふ法け又その百姓を
淡路の慶帝ふ奪ひしるる其石の蛤淡路
より出子次を檀の浦ふ引之を附さむむあ
の風ふ大園寺繩を吹透し

成美曰大雲も繩を素名影るり大雲家
の生烟より又一書小園と龜山とありふて出
俗タイコちと法音よれふ又一書小水口も
有又一書小園と龜山とありふ何り云

板村の龜ちありあふぬ氣は手
田北斤隅ふ苗れ云さ
一書小拳白集らるる山田のふをふのり
して残ふ子苗や板のむら立世古歌るる

龜の甲意らるる時を鳴るる
雀牛 糞 よ風 此 しくき

一書小不白糸喰らるるを屋とくえゆ眼を
枯果しるあしりて弟三りてあ季を定ぬ
しり 成美曰根本律 曰有二鷲共一鷲爲
春親友遇天大旱池水皆空鷲欲東西麓

曰好自存活樂曰汝去我何不依可相持往
去我誓曰汝銜一牧我口咬共去他園空中飛
遇人或見曰空中二鷲共銜一牛糞斤飛鷲
曰不是牛糞因口落佛言如人口遇 愚考何

らまし海しれしるるの素といふ古詩
曰老龜烹不爛移禍於古素此詩の意ハ其
の孫將の時永康の民山ふ入て大龜を埒
是山龜らるる又素龜と云故ぬ何ト龜を用

ふり為るくいしを龜を以て言て曰此度不
良し一て君ら為るはらと詠人乞を怪し
む主人龜を吳王に獻らむと欲して舟に
乘りて舟を夜越里といふ岸に舟を停るま
て泊るに舟は舟くみの樹の夜中を地を呼て
云芳きらうふ乞結何ぞ強らや龜言云我
狗繫をくらきて將ふ意らうへ一ハシツリ
何ぞ思ふふはらむ南山に薪を尋すとも
我を怪ふす何ぞも一樹の云吳王は法
為る乞遊何ら必き我はらぬき樹を求めて
意む龜の云多くめのいふるるまは禍汝に
及む樹則點す吳王至て王に獻す孫權
命して是を烹き一む薪の車を燒とい
へとも詠乞の如し詠言の恰を呼て是を

言ふ乞避言て曰是を烹るは老耄を伐て
せし忽解むと獻する人の曰龜と樹と同
言せしを伐る則彼樹を伐らむと意む
ゆゑ所不解るとも一口を綱の門古に禍
の根烹らむ何らも喰せし死してハ
ト龜の蓋られしとの意むらう乞牛糞の
賜不應に又此変を東坡の坐右の銘に曰
坐中談笑慎桑龜牛糞ハ龜の裏詞く
百姓の木棉志甲乙十一月十二月甲を裁く
愚考博物志に曰十一月十二月甲を裁く
木の末とすすこれんを木棉志甲乙人
木の末とす初めを末とす之と云其
毒氣を憚るるものなり
小糸をくらゆるかしの繩

愚考確も榎子新論曰伏羲制_二杵臼_一之利
後世加巧踐確而利十倍也 和漢文探曰
新木為杵塲地為臼かゝ印の繩上より下
けて力繩と云

独麻て翼の向ひらき藤の肉
瑞輝落てまゆる 行 燈

秋萩の序前よちる我が坊之丸
風呂の加減の志のりくり

愚考傳ふ曰本式十句第二卷目は後連附
一ヶふ必有べし是則後連附の傳ふを大切
のまらり夫をかりふ附合せしむるあり發句に
長句を附短句と短句を附するあり次の句は
清前新體不風呂寸へて傳授は尖るべしと
解さむるや 鶴上の妙法あり

雀をよめる 籠の ちいめ き

一書不奪の餅の小鳥を入る籠の名をちいめ記
といふ 左記曰ちいめをちいめをちいめとす
時先百舌をこころむとぬくを百舌を大中よ
う読み置てなるを又ちいめをこころむとす
木上よゆひはちて鳴けるなりその声を笑
てなるの来るをたんと 愚考若くは文字
を置てすのよ遠まに蟹鳴と書ふは如し

一説よきはちち若衣の俚言なりと云
花の以屋の日納よきと云て

一説よきはちち若衣の俚言なりと云
晴屋や苗代時の 角大 師

一書よえ三大師なり角大師のりり母よ知
名ふと稻の糸よ田の畔よ関在よて是を
立よと回をよるしと 唐土よて周の後復成

生を止むとらう此子程くの怪談ありり色
とく夫を考うといふ所のるる事ハ不用なり此
歎を祇とよふるを日本異記に云或狐女
小化して或人の妻を成て子をまうくを後小
家の犬よゆゆく妨らるる身を何をもくを
去て二度家よりうらに此時素戔と名付
たりとて丈夫一首の歎ありや我
戸よれちぬ玉垣をひそりふりていふ
子ゆくよ狐を来つ癖るといふ訓をよ
み得る也

ちり花よ雪 張引すら考ありて
ふれ場のふりゆるけり

愚考雪詰ち和事始ふ云千村休茶云
の時語次入の折雪をいよて茶履の裏

牛の皮を法けてをきりぬ此所も天正十六年
大岡秀吉公北野におわて大茶湯を催したるひ
百間の長屋を建て大小名も勿論大舎を
移してされるとを雪詰ふ北野の馬場を附て
二句の間ふ茶湯を拵せしむるなり

神社考曰北野天神者右大臣道實公之靈
也昌泰四年正月二十日左近筑紫延喜三年
二月廿五日薨干配所葬于安樂寺天慶三年
菅靈託七条坊婢女文子欲樓右近馬場天
曆元移立祠于北野正曆四年五月遣勅使於
宰府安樂寺詔贈大政大臣正一位云々
追考
。龜の鳴くは故事を冷泉著家郷。○○。○
川添みよりの夕ぐれを何そそくまけハ龜の
ちりらむき

